

東北応援ツアーに参加して

報告者 今村 修 (1979年二部法学部卒)

今回のツアーに応募した動機は一つだけではありません。私は自宅の京都市内から集合場所である福島空港まで軽自動車を利用しました。第1番目は2年前の夏に山歩きのため福島県を訪れましたが、その時の福島と現時点での被災地と被災された方たちを自分の目で確かめること。2番目は自分に何が出来るかということ。3番目には、原発事故20km圏内警戒区域まで行くことでした。4番目は100名山を一つでも歩くことです。

第1印象は、震災後一年半も経過しているのに復興がどれくらい進んでいるのかわからない。というのは、被災地を見学し、元豊間中学校校庭の瓦礫の山を見た限りでは何も進んでないということです。私は本職は行政書士ですが、商工団体にも加入し、事務局にもかかわりをもっていて、中央の団体が発行する新聞などで中小零細業者の経営が特に遅れていることが、地域経済の回復にとって大きな障害となっていることです。「営業と暮らし」が戻ってはじめて復興といえるのではないのでしょうか。

第2印象は、宿泊した「ハワイアン・リゾートホテル」支配人様から説明をしていただいた、震災直後の情報が入ってこない状況の中でのホテル内のお客様への対応でした。幸いなのは、ライフラインに被害が出てないものの、1棟は利用できないことでした。

震災当日は、1000名、5日分の食糧をまず確保しホテル内での食事と宿泊を提供され、そして翌日は海岸沿いが通行できないために、他の通行可能な道路と途中の食糧、トイレの場所を地図にしるすために宇都宮市まで12時間かかったこと、13日には館内630人をのべ18台のバスを手配して送られたことです。

一方で契約社員800人にはやむなく解雇、残った正社員には給与カットや賞与半分を余儀なくされました。正社員は休業中、長崎「ハウステンボス」様からのご支援で研修を受入れていただいたことも述べられました。

また、映画「フラガール」で全国的に知られた彼女たちが、震災後、全国を訪問し元気と勇気を発信していったのです。

そして同年10月1日、プール部分を残して再開され、現在は震災前の集客数に戻ったそうです。

私は、こちらで「暮らしと経営」は表裏一体であることをあらためて学びました。

第3印象は、被災された校友から車窓ながら、門柱を残して津波に流されたご自宅前を見たことです。その場所は緑地公園化される予定になっており、二度と同じ場所で住むことが出来ない、そして別の居住地を求めなければならないことでした。生後から京都市内にすみ続けている私には考えられない出来事が起こってしまったのです。

第4印象は、農産物が豊富な福島県で今なお、出荷できない作物があるということです。私は柿が好物なので途中、スーパーにて買い求めましたが、買い求めた柿の産地は遠く離れた近畿地方の和歌山産でした。これが現実なのだ実感しました。震災だけでなく原発事故で汚染された作物、されてない作物でさえも風評被害で売れなくなってしまっているのです。何箇所か立ち寄った道の駅で販売されている安価な農産物も山積みされていて買主を求めているようでした。

以上のように、悲しい出来事が今も進行中なのです！